

民間学生交流 ～日本台湾学生会議 in AKITA～

日本台湾学生会議は、日台の民間交流を双方の学生が引き継ぎ、次世代の交流へ発展させるために2005年に発足した団体です。台湾には台湾日本学生交流会がカウンターパートとして発足しており、双方が本会議開催の為、毎年日本と台湾の地を訪れ、テーマ毎のディスカッション・合宿、大学教授による講義等を通して、日台の社会現状を勉強しています。

ここでは、平成25年夏に、100名規模で秋田で行った本会議の様子を、4名の参加者より、報告させて戴きます。

日本台湾学生会議本開催を通して

東京本部 戸莉聡美

(東京外国語大学国際社会学部中国語専攻2年)

私は今年の春に日本台湾学生会議という団体に出会い、八月に行われた本開催に初めて参加した。人見知りで自分から他人に話しかけることが苦手な性格であるため、本開催初日は緊張で上手く分科会班のメンバーと話すことができず、落ち込んでしまった。しかし分科会班でのディスカッションやディベート準備、東北観光などの日程を通じて仲間と親睦を深め、約一週間という期間の中で、今までの自分では考えられないほどの多くの人と交流をし、仲を深めることができたと振り返っている。本開催での交流を通じて、大学生という共通項がありながらも異なる文化的背景を持つ人々との交流、そして学生間、更に言うと民間での交流の大切さを身にしみて感じる事ができた。先輩方の話から、参加する前にFacebook上で友達の数が一気に増えるとは聞いていたが、実際、本開催後にはFacebookのタイムラインは中国語だらけになり、嵐のように友達申請が行き交っていた。現代のSNSの普及の恩恵もあり、今も夏に出会った数々の友達との生きた交流が続けられている。

100人の日本人と台湾人と寝食を共にし、分科会での討論で互いの価値観の違いでぶつかったり、一つのテーマをともに考えたりした体験は、私にとってかけがえのない大切な思い出となった。勉強だけでなく秋田の文化をともに「体験」したこと、学生らしく皆で恋の話や将来の話をして盛り上がったことも印象深く記憶に残っている。

私の分科会班はメンバーが個性的であった。分科会中のディスカッションの発表会に際して、「日台の教育」というテーマに関する動画を睡眠時間を削ってまで作成したり、データ収集用にアンケートを作ったりするなどの、他の班とは少し変わった形式を用いて発表を行った。「日台の教育」という幅広いテーマの中で、いじめ問題や英語教育などを扱ったが、目に見える形で日台間での差異を意外なところで発見し、思わぬ収穫を得ることもあった。例えばいじめ問題に対して、「いじめ問題はなくなると思いませんか？」というアンケートの問いに対し、日本人は9割が「なくならない」と答えた一方で、台湾側は「なくなる」という回答が6～7割ほどであった。アンケートを行う際に、分科会班ではおそらく台湾における多様性が関係してくるのではないかと予測したが、学術的により突き進めたい結果が生まれたこともあった。

日台間の学生の意思疎通において、しばしば問題となってくるのは言語であったが、日本語が堪能な台湾人も多かった上に、こちらのたどたどしい中国語にじっくり耳を傾けてもらい、おかげで特に大きな齟齬もなく話し合いなどを進めることができた。英語という共通の言語はあったものの、本開催中には自身の語学力の乏しさに落胆することも少なくなかった。本開催での経験は、今年からの台湾留学に向けてより中国語を磨こうというモチベーションにも繋がったと実感している。

来年度に私は台湾に留学する予定であり、その留学中はカウンターパートである臺灣日本學生交流會の活動に参加するつもりでいる。より積極的に参加をして、留学先での授業で活発な意見交換ができるよう、今から日本台湾學生會議の活動に参加したり、本などで台湾やアジアについて、さらに中国語を勉強するのはもちろんのこと、日本についても学んでいきたい。

本開催への参加は、留学への思いをより強くさせたのと同時に、自身の将来を考えるきっかけともなった。日本と台湾の架け橋を担える仕事に就きたい、という気持ちがより現実味を持って込みあがってきている。今年の8月に台湾で行われる第九回本開催や自身の台湾留学を通して経験と知識

を増やし、今後の糧にしていきたいと思っている。

本開催を通して

東北支部 眞田剛志

2013年8月、日本の東北、秋田県では他の地域に比べ過ごしやすい天気が続いていた。そんな秋田の地にある国際教養大学で、第八回日本台湾學生會議の本開催が開催された。約一週間という短い日程ではあったが、そこでの新たな出会いや発見、共同生活というものは、私の今年の夏をかがえのないものへと変えてくれた。

本開催初日、今回が初参加で知り合いのいなかった私は、先輩方が久々の再会を喜ぶ中、とても肩身が狭かった。これから一週間をともにする仲間たちに声をかけようとしても、話題が思いつかず、ましてや中国語が話せない私にとって、台湾人学生に話しかけることなどできなかった。しかし、同世代であり、互いの国に興味を持つ学生間の集いでそのような心配は無用だった。私のルームメイトの台湾人学生は英語が堪能であったため、難なくコミュニケーションを交わすことができた。私にとって日台間の話を英語で交わすの



は新鮮であり、そこから台湾のスポーツ事情などを知ることができた。その他の台湾人学生とも、漢字を使っての筆談などを通してお互いの言語を学びあうなど、言語という壁は私が思っていたほど大きなものではなかった。また、日本人学生とも学年を問わず、共同生活を通して全国的に交友関係を広げることができた。こういった素晴らしい仲間たちがいなければ、今回の本開催はこれほど特別なものにはならなかっただろう。

本開催で特に印象深いのは、やはりメインの活動であった分科会だ。分科会を通して日台両国の学生は試行錯誤しながら意見を交え、お互いの国の価値観などを共有する。そして分科会班の努力の結晶として参加者全員に自分たちの意見を伝える。実際の発表会では、各分科会班により、日台間の文化的差異が日常の例と関連付けて報告された。大学に入学してから台湾を知るようになった私にとって、そこから得られる知識というのは驚きの連続であった。例えば、いじめ問題も日本と台湾ではその対象や原因が全く異なるなど、自分が普段では全く考えもしないテーマについての発表は大変興味深かった。また、今回の分科会はディベートが最終的な目標であったため、各分科会班の準備期間における努力を、ディベートへ臨む姿勢や発言からうかがうことができた振り返る。プレゼンテーションのような単なる発表ではなく、班内で協力をして時には臨機応変に意見を出すなど、団結力も必要であった。それがより一層班の結束を高めたのだと思う。私の分科会班は日台の観光がテーマで、世界遺産の観光地化を賛成する立場であった。ディベートに向けては経済効果に関してだけでなく、多角的な視点を持って意見を準備した。例えば、観光地化により人の手が増えられ整備されることで、遺産の保全に役立つといった意見を用意してディベートを臨んだが、データ不足が目立ち、相手の鋭い質問に答えることができなかった。結果は相手方の勝利であったが、このディベートを通して、今後ディス

カッションをするときにどのように進めればいいのか、どのように相手に反論すれば自分たちの意見をより優位にできるか、など多くのことを学ぶことができたと感じている。

また講演会では、国際教養大学の山崎教授から日台の高等教育について、問題や見解などの話をいただいた。分科会中にも教育問題を扱ったが、山崎教授の意見は説得力があり、私にとって新鮮に感じた。日本の大学では、専門的知識を学ぶことはあまり重要視されていない。実際、教授が教鞭を握っていらっしゃる国際教養大学は、リベラルアーツ教育が話題を呼んでいる学校である。しかし、台湾はそうではない。専門的な知識が重要視され、リベラルアーツのような教育指針はあまり受け入れられていないという。国際教養大学に通う私にとってこのことはとても興味深いものであった。文化の違いを矯正することは困難であるので、それを受け入れて、どのように違いを生かして行動するかが最も重要なのであろう。とても考え深い講演会であった。

分科会や講演会以外の活動も、非常に思い出深いものになった。文化ナイトでは両国の支部ごとにダンスや楽器演奏などの出し物をして、お互いの文化を紹介し合った。最も印象に残ったのは台南支部の蛍光棒舞であり、先端にライトのついたロープを音楽に合わせて振り回すというパフォーマンスであった。その名のごとく、暗闇で回転する光は蛍のようでとても幻想的であった。近代的に思えるパフォーマンスであったが、実は長い伝統があるものらしく、それも私の驚きをより強くした。他にも国際教養大学の竿燈会による演目など、普段はなかなか体験したり目したりすることができない発表が目白押しで、とても素晴らしい一夜であった。

約一週間という短い期間ではあったが、これほど充実した日々を、私はこれまでに送ったことが

なかった。この本開催で得た知識、考え、交友関係をこれからの人生で有意義に生かしていきたいと思う。

「国際交流の意義」

関西支部 原田沙美

今年で八回目になる日本台湾学生会議の本開催だが、今回は私にとって二回目の参加であった。今年の本開催は、昨年のものとは異なる点が大きく二つあった。ひとつめは日本の秋田での開催であったということ、ふたつめは自分自身が運営スタッフとしての参加であったということである。

この本開催に向けて半年前ほどに日本側のスタッフのみで合宿を行った。東京・東北・関西からスタッフが本開催について意見を出し合った。気づけば朝から日が暮れるまで話し合いをしたことを今でも覚えている。この合宿は東京・東北・関西の3つの支部がじっくり交流を深めることができる貴重な時間である。合宿最終日には朝まで日本台湾学生会議について熱く語り合ったりできるのも、この仲間だからこそだ。合宿を終えたあとも、引き続き支部でSkypなどを通して内容を深めていった。

そして迎えた本開催前日。私は関西支部スタッフの一員として秋田県にある国際教養大学に到着した。会場の場所を確認したり、荷物を運んだり、スタッフの仕事を確認したりと夜までミーティングは続いた。明日には日本側と台湾側の参加者たちに会えるという期待を抱いた反面、スケジュールは無事予定通りに進むのだろうか、企画した内容はうまくいくだろうか、といった様々な不安が頭をよぎった。そのような中、私たち関西支部ではうまく情報共有が出来ておらず、当日の企画に必要なものがそろっていないという問題が発生し

た。その時に助けてくれたのが、東京・東北支部のスタッフの仲間たちであった。皆各々の仕事で疲れ切っているはずなのに、夜遅くまで嫌な顔一つせずに仕事を手伝ってくれたのである。東京・東北・関西それぞれに住む私たちが、こうしてひとつの目標にむかって協力し合える絆を強く感じ、このような点が日本台湾学生会議の魅力のひとつであると改めて感じた。

これまでは運営スタッフとして本開催を振り返った。参加者の一員として本開催を思い返してみると、自分自身、最初から最後まで全力で楽しむことができたと感じている。その中でも一番思い出に残っているのは分科会である。例年の本開催では、分科会はディスカッションのテーマごとに班が分かれており、最終日にはグループでディスカッションした内容を、PPTにまとめて発表するという形式を取っていた。しかし今年から形式を変更して、班対抗のディベートを最終日に行うことになった。私の分科会班は日本人と台湾人各6名の計12人で、「日本と台湾の教育」についてのテーマを担当した。メンバーは日本人・台湾人ともに個性的な人たちばかりだった。一人一人が自分の考えや意見をしっかりと持っていて、性格もハキハキしている人もいれば、とてもおっとりとした人、それぞれの個性がとても強かったのである。テーマは「日本と台湾の教育」ではあっ



たが、いじめ問題から受験制度、英語教育にまで幅広くディスカッションを行った。最終日のディベートまでに、各分科会班の討論の結果を発表する場が三回あった。ほとんどの班ではパワーポイントを用いて発表を行っていたが、私たちの班ではパワーポイントを作って発表するだけだはおもしろくはないと考え、参加者たちにアンケートを取ったり、ビデオを撮影して内容を説明したりと毎回様々な工夫をした。そのため毎日夜遅くまで話し合いや資料作成に取り組んだが、どんなに眠い中でも笑いは絶えず、私にとって、とても充実した時間であった。

そして迎えたディベート当日。約一週間の短い期間ではあったが、私たちの班のチームワークは最高だったと振り返っている。お互いがお互いの性格を理解していたためか、周りを見ながら終始連携がとれており、素晴らしいディベートとなったのではと思っている。短い時間でもお互いの国の文化や特徴、自分の意見を交換し合うことで相手のことを十分に知ることができるのだ。昨年もそうであったが、やはり今年も本開催が終わると仲間との別れが惜しくなった。しかしこの本開催で出会った仲間とは、今でも頻繁に facebook や LINE などの SNS を通じて連絡を取っている。私が台湾に行った際は、必ず台湾日本学生交流会の仲間に会う機会を作り、また彼らが日本に来た際には、私たちが日本を案内して交流を深める。これからも私たちの友情はこのように一生続いていくだろう。

日本台湾学生会議に参加しなければ、このような国境を越えた最高の仲間たちに出会うことはなかったのだろうと思うと、この団体に巡り合えた私は本当にラッキーである。相手の国の文化や歴史を通してさらに自国に対しての理解を深めることができる。台湾が好き、日本が好き、この気持ちだけで出会うことができる仲間たち。目標に向かって熱く語り合える場所、それが国際交流のよ

き点ではないのだろうかと思ふ。今年行われる第九回本開催は台湾での開催である。新しいスタッフとともに次はどのような本開催になるのか、どんな人たちに出会うことができるのか、今から楽しみと期待を胸に抱き準備を進めていきたい。

日本台湾学生会議第8回本開催を通して

東京本部 青木駿

2005年に日本台湾学生会議（略称、日台）が設立されてまもなく9年になろうとしている。同時に、毎年夏に実施している日本人台湾人学生による交流合宿「本開催」も昨年で第8回を迎えることができた。私は第5回から参加しているため、日台創設以来ほぼ半分の歴史を直に肌で感じてきた。この歴史の流れの中で確信できることが一つある。それは、日台、更には日台関係が様々な紆余曲折を経ながらも確実に前進しているということだ。昨年の夏に、日本秋田県にある国際教養大学で開催した「第8回日本台湾学生会議本開催」においても、この前進がひしひしと感じられた。

今年の本開催プログラムの中で最も特徴的だったのが、メインイベントの分科会である。前年までは、1班およそ10名の日本人台湾人混合グループを10班作り、本開催期間を通じてある1つのテーマについてディスカッションを行い、それをパワーポイントにまとめ、最終日の発表会で共有するという流れであった。この形式の問題点として挙げられるのが、約1週間ある本開催期間中、一貫して同じテーマのディスカッションを行うために参加者が飽きてしまう点や、ディスカッションのプロセスよりも最終日に使用するパワーポイント作成に多くの時間を費やしてしまい、肝心の交流ができていない点であった。これらを改善す

るために、第8回本開催では、まずディスカッションテーマを「教育」「社会」「国際」「文化」の4つに分け、この中の一つから関連性のある3つのテーマについてディスカッションをし、一つのディスカッション終了後にそれぞれ内容共有を行うという形式に変更することに決めた。例えば、私が所属していた「教育」班は、教育に関係のある「いじめ」「英語教育」「受験」の3つのテーマについてディスカッションを行った。こうすることでより双方にディスカッションする時間が長くなり、自然と交流の質も向上した。更に、新たな試みとして、最終日に分科会班対抗のディベートを行うことにした。ディベートのテーマは各分科会班がディスカッションで取り扱ったテーマと関連性のあるものに設定をして、ディスカッションをしながらディベートの準備ができるだけでなく、まとまりのある、包括的な内容について学べるという画期的な形式に改善をした。具体的には「教育」班は「高校を義務教育化すべきである」というテーマについて肯定派、否定派に分かれ、ディベートを行った。肯定派からは、全体的な教育水準の上昇や効率的な小中高一貫カリキュラムの提案などがあつた。一方否定派は、義務教育化に伴う授業料無償化が原因の国家予算上昇や進学率を見る限り、既にほぼ義務教育化されていると言ってもよく、教育水準の大幅な上昇は見込めないなどの反論が出た。以上のように、第8回本開催における分科会は、例年に優る非常に有意義で素晴らしいものになったと振り返っている。

分科会などの学術面での交流プログラムの有意義な改善もさることながら、文化面の交流プログラムの企画にも工夫を凝らした。東京本部、東北支部、関西支部、台北本部、台南支部、スタッフ一同、そして全員が各々準備してきた出し物を発表し合う「文化ナイト」では、例年のような歌やダンスももちろんあつたが、東京からは三味線、東北からは竿灯など、日本人ですら普段は触れる機会の少ない伝統文化を体験することができ、台湾人のみならず、日本人からも非常に好評であつ

た。その他、関西からは御当地クイズ、台北からは演劇形式の台湾語講座など、とても充実したプログラムとなった。また、例年のように観光プログラムも実施したが、今年はより東北味わってもらうため、日程の異なる2つの観光プログラムを用意した。一回目の観光で行った秋田のなまはげ館では、なまはげが実際にどのように家庭へ訪問をし、どんな様子なのかということを劇形式で鑑賞した。初めてなまはげというものを聞いた台湾人も多く、係員の方の説明を熱心聴いていた。二回目の観光では、秋田の田沢湖や岩手の小岩井農場などを訪問し、時期が上手く重なつたこともあり、夕方からは花輪祭りにも参加することができた。実際にお囃子やお神輿なども見ることができ、どれもが貴重な体験となった。

第8回日本台湾学生会議本開催は、以上のような様々な取り組みを通じて、例年に比べて最も質の高いものとすることができたと感じている。これも一緒に汗を流して頑張ってくれたスタッフがいたからこそ、実現できたものである。現在、私は後輩の指導やアドバイスをする役職についている。自分が日台で学んだこと、失敗した経験、全てをアウトプットし、後輩へと引き継いでいきたい。これからも日本台湾学生会議が日台の懸け橋として進歩していくことを応援するとともに、日台交流が更なる発展を続けていくことを切に願っている。

